

[報告] 第21回歴史地震研究会参加記 (野外見学会を中心に)

滋賀県立大学 人間文化学部* 東 幸代

Impression Report of 21st General Meeting

Sachiyo AZUMA

The University of Shiga Prefecture, 2500, Hassaka, Hikone, Shiga, 522-8533 Japan

§1. はじめに

2004年9月17～19日に開催された第21回歴史地震研究会鳥羽大会に参加した。初参加を決めた理由の第一は、中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」小委員会の「寛文近江・若狭地震分科会」における共同研究者である西山・小松原両氏が、同地震に関する研究発表を行うことになったためである。

実は、今年はじめに急遽上記分科会のメンバーになるまで、近世漁村史を専門とする私にとって、歴史地震は未知の分野であった。ただ、ピンチ・サーバーがピンチを招くわけにはいかないの、この数ヶ月は可能な限り知識の吸収に努めてきた。その過程で、文系・理工系それぞれの研究成果が如何なる相互批判を経て利用されているかが気になりだした。すなわち、参加理由の第二は、現段階において両者の対話がどのようになされているかを知るためである。

第三の理由は、「安政および明応東海地震に関係した三重県内の史跡・遺跡」をテーマとする野外見学会への参加である。現場を歩くことで初めて理解できる歴史事象が多いことは、私自身も体験的に知っている。

§2. 野外見学会前日まで

初日・2日目の研究発表会は、大変勉強になった。モデルの設定とその検証という手法、まず地震ありきという議論の構成、誤差認識など、違和感を覚える点もあったものの、自分にとって親和的な手法の報告もあり、また、歴史史料は利用されていないものの純粋に面白いと思う報告も多かった。

報告者が扱ってられる資史料や手法の多様性と、聴衆がそれら全ての報告に対してみせる真剣さは、野外見学会についての私の予測が外れることを確信させた。かつて理系某分野の研究者集団と野外見学

会に同道した際、興味を惹かれる対象の相違から集団が自然と二分され、妙に感心したことがある。今回も、大会前日までは、同様の現象が起こるのではと予測していたのである。しかし、歴史地震を隈無く追求しようとするこのメンバーなら、きっと見学会も楽しいに違いない。私の期待は高まった。

§3. 野外見学会当日

朝は生憎の小雨であった。午前8時に近鉄鳥羽駅前の駐車場に集合してパンフを渡される。歴史系の見学会パンフの定番である地名辞典からの張り付けがない点に気付く。

バスはまず、鳥羽市浦村町本浦の清岩庵へ向かった。ここで津波石を見る。この津波石は、安政地震の津波による被害について記した自然石の碑である。「諺曰」として、地震のあとには津波が来ると刻まれている。史料の少ない寛文期を検討している身としては、このように種々の形で資史料が残る幕末を羨ましく思う。

バスに戻る途中、港で漁師さんに遭遇。台風のため、今年は港の防潮扉を3回も閉めたとおっしゃっておられた。改めて今年の自然災害の多さを実感する。

次に鳥羽市国崎の常福寺へ行く。国崎は、津波対策のために集落が高地移転した最古の例とされる集落である。常福寺でも境内の安政津波石の文字を皆で読むが、パンフの翻刻史料に随分と読み間違いがあつて驚く。寺を後にしながら、こうした高地移転には、例えば漁法の特殊性など、津波の可能性以外の要素はどれだけ影響を与えうるものなのか、しばし考えてみる。

次に鳥羽市相差町に赴き、湿地堆積物の採集地点を見学した。初日に発表された岡橋氏の解説付きである。発表の要旨は理解できたものの、専門用語

* 〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500

が全く理解できず、堆積層の図を前にふんふんと頷く参加者の後ろ姿を眺めながら、嗚呼、理解できればもっと楽しいのにと歎息する。採集地点は数ヶ所に分かれていたので、徒歩で移動。その途中に、電柱に海拔を示す標識があることに気付く。日本海側で育ち、かつ日本海側ばかりを集中的に分析してきた私にとって、恥ずかしながら初めて目にする標識である。聞けばこの辺りでは当然のように見られるものであるという。

雨がすっかり上がったため、相模町千鳥ヶ浜で昼食と美しい景色を楽しんだ後、午後一番は、伊勢市大湊の石積み防潮堤を見学する。パンフ掲載の論文を読むと、幾度にもわたって罹災し、修復が施されていることがわかるが、目の前にある防潮堤はそれにして新しい。ここで全体写真を撮影する(写真1)。

最後に、一時間少々バスに揺られ、津市安濃津へ向かう。焔魔堂前に着く頃には、これまでの晴天が嘘のように、土砂降りに。しばし雨宿りをしながら、三重県埋蔵文化財センター伊藤裕偉氏のご説明をうかがう。安濃津は、明応地震によって海中に沈んでしまったとの伝承が残る港であるが、近年の考古・文献史学の研究によってそれが否定されている。ただ、壊滅的

な被害を被ったことは間違いない。近世の趣の残る町並みを歩きながら、同じ明応地震の被災地ながら、大湊と安濃津とでその後の復興に大きな差が出たのは何故なのか考えさせられた。

その後、全行程を終えたバスは津駅へ向かい、予定していた午後5時より若干早い時間で解散となった。

§4. おわりに

見学会は勿論、研究発表会までもが非常に楽しく、知的刺激に充ちた三日間であった。理工系の研究者と研究成果を共有することを前提とした場合、どのような問題に気を付けて歴史地震に関する史料を読み、分析していけばよいか、何となくわかったような気がしている。参加して本当によかったと思っている。

末筆となりましたが、本大会の開催にご尽力いただいた皆様に心より御礼申し上げるとともに、本会の益々のご発展をお祈り申し上げます。



写真1 第21回歴史地震研究会における野外見学会の集合写真